

特別支援教育だより

三重県立特別支援学校伊賀つばさ学園 教育支援部 発行
令和4年度 第3号（12月12日）

特別な教育的支援を必要とする子どもの適切な行動の獲得および定着に向けた「ほめる」ことの効果やその必要性について、以前、こちらの紙面で紹介をしました。また、「ほめる」ことは子どもの自己肯定感を高めるだけでなく、支援者側にとっても、子どものよいところに着目し、肯定的な評価を行いやすくなるなど、双方にとって大きなメリットがあります。さらに、子どもにとってはほめられることで、「もう一度やってみよう」「自分からやってみよう」といった思いにつながるなど、動機付けの面でも大変有用です。

こうした、「ほめる」だけでなく、「はげます」「なぐさめる」などを実践するためには相応の技術が必要となってくるため、対象となる子どもの特性や当該の状況によっては簡単なことではありません。そうした場面で役に立つ考え方として、動機付けに関する理論がいくつかあります。その中の一つである「原因帰属理論」について、紹介したいと思います。

原因帰属理論とは、ロッターとワイナーによって示された、課題の成功または失敗の原因帰属に関する有力な理論とされています。子どもに対する指導支援において様々な言葉かけを行うものの、期待した効果が見られないことがあります。場合によっては、事態が改善しないばかりかよくない方向に進展してしまうことも少なくありません。支援者による働きかけが、子どもの行動やモチベーションに影響を与えてしまうのです。原因帰属理論について正しく理解して状況を整理することで、適切な対応を選択することができる可能性があります。

この理論では、原因帰属（ある結果の原因を推測、判断する過程）のスタイルは「統制」と「安定性」の組み合わせによるとされています。「統制」は内的統制（個人の要因）と外的統制（環境の要因）からなり、さらにそれぞれを可能か不可能かに分けて考えます。これは、自分にとってコントロールすることが可能か不可能かということです。「安定性」は安定（変わらない要因）と不安定（変わりやすい要因）の2つに分かれます。このような3つの軸の組み合わせによって8つの原因帰属のスタイルが示されました（下表）。ワイナーは、成功や失敗に対してどのような原因帰属をするのかによって、その後の行動に対する期待や失望等の感情が生起し、行動が決定されると考えました。

原因帰属の次元と要因（Weiner, 1979）

	内的		外的	
	安定	不安定	安定	不安定
統制不可能	能力	気分	課題の難しさ	運
統制可能	不断の努力	一時的な努力	教師の偏見	他者からの日常的でない援助

例えば、「内的・統制可能・安定」は「(不断の)努力」への原因帰属になります。自ら目標の達成に向けて努力し、よい結果が認められた子どもに対して「すごいね(結果をほめる)、頑張ってたからね(過程をほめる)」のような言葉をかけることで、次も頑張ろうという意欲につなげることが可能になると考えられます。達成動機が高いと、成功を能力や努力に帰属させ、失敗を努力の欠如に帰属させる傾向が強いと言われています。ですので、仮に失敗しても、頑張れば次は大丈夫と考えられるようなアプローチが必要です。注意しなければいけないのは、家庭などで次のような言葉かけをされてしまう場合があることです。「(課題が)簡単でよかったね」という言葉かけは「外的・統制不可能・安定」となり、この帰属を行っても意欲が向上しないだろうことは想像できると思います。また、「ラッキーだったね」のような言い方も「外的・統制不可能・不安定」の帰属になります。頑張っても運に左右されるのならば、その頑張りは意味がなかったと思ってしまうでしょう。何気ない一言が子どものモチベーションを下げてしまう可能性があることに留意する必要があります。

一方で、根気よく頑張っている(ことを支援者側も知っている)のに、よい結果にならなかった子どもに対してはどうでしょうか。特に、支援を必要とする子どもの場合、努力が成果につながらないことも少なくありません。そのような子どもに対して「努力が足りない、もっと頑張れ」と背中を押すことは、むしろ無力感を強めてしまいかねません。「努力」への帰属については、子ども自身の持つ達成動機の高低によっては、意欲をさらに低下させてしまうことがあることを知っておく必要があります。このような場合には、「うまくできなかつたのは、やり方が違ったかもしれないね」のように方法や方略に帰属させることが考えられます。この言葉かけは、「内的(自分のやり方)・統制可能(やり方は変えられないものではない)・不安定(自ら変えることができる)」となっており、これは達成動機を高める原因帰属の一つと考えられています。ですので、このアプローチの方が「できるかも」と期待をもたせる(さらには頑張りにつなげる)ことができると考えられます。

以上のように、どのような帰属がよいのかということは、状況や子どもの実態によって変わってくるということが確認できたと思います。参考にさせていただけたら幸甚です。

参考：金子智恵子「原因帰属尺度構成に関する研究」 他
(文責 清都)

つばさ学園の行事について

今年度、1学期につきましては学校見学会を3年ぶりに開催することができました。また、公開体験授業についても例年通りの方法で実施することができました。しかしながら、2学期の小学部公開体験授業は開催方法を変更して実施することとなりました。ご理解ご協力をいただき感謝申し上げます。今後も、適切に情報提供を行うことができるよう、状況に応じた方法を検討してまいりたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

令和5年度の予定については、4月以降お知らせいたします。